

水田に水が引けるよう ... 千代田堰堤

地域産業

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

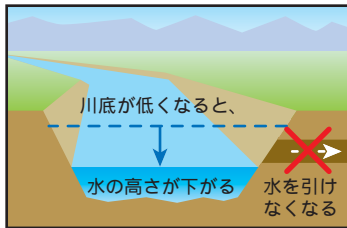
用語

さくいん

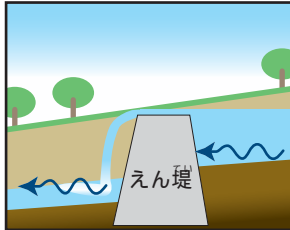


明治時代の終わりころ、千代田(池田町)に広がっていた水田。大正12年(1923)には、十勝川から水路を引くことになる。

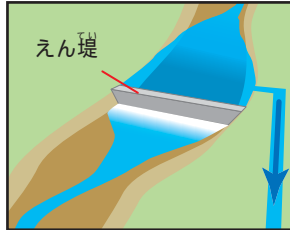
(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)



流れが速くなり、川底がけずられることで、水田への水が引けなくなる。(図はイメージ)



堰堤をつくと、流れが弱まり、川底がけずられにくくなる。



堰堤をつくと、水面を高くできるため、水を引きやすい。

千代田堰堤

千代田堰堤の工事は、昭和7年(1932)から始まり、長さ160m、コンクリートの堰堤です。

千代田堰堤をつくることで、十勝川の水をいったんせき止めることができます。すると、水の流れがゆるやかになって川底がけずられにくくなるのと同時に、水面の高さが一定になり、水田への水をいつでも引けるようになります。

水を引くための施設もふくめて、昭和10年(1935)に完成し、千代田地区や利別地区(池田町)などの水田へ水を送りました。

明治26年(1893)、増田立吉が士幌川下流(首更町)で水田に成功しますが、十勝での米作りは大変でした。

開拓者たちの主食は、イナキビや麦、ソバなどで、季節によってはジャガイモやトウモロコシなどになりました。米のごはんを食べることができるのは、正月(とお盆)くらいだったのです。(右ページコラム・p173)

開拓者たちにとって、ふるさとで食べていた米のごはん、そして米作りは大きな夢でした。

蝶多(池田町千代田)でも、明治30年(1897)から米作りへのチャレンジがおこなわれ、明治32年(1899)に成功しました。

明治37年(1904)の豊作から、水田が増えていきます。

そして、大正12年(1923)には十勝川から水路が引かれ、千代田には水田が大きく広がりました。

新水路ができると水が引けない？

昭和に入り、千代田(池田町)の下流で統内新水路の工事(p190)が始まります。洪水を減らすために、十勝川の流れをよくする工事です。

ところが、川の流れがよく(速く)になると、川底がけずられるようになり、川底がけずられて低くなると、川の水面も低くなっていきます。そうすると、千代田の水田をうるおしていた水が引けなくなってしまっておそれがありました。

そこで、川の流れをおさえるためと、水田への水を引きやすくするために、堰堤(千代田堰堤)がつけられることになりました。



昭和10年(1935)完成した千代田堰堤。千代田や利別(池田町)の水田をうるおした。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

1 蝶多(ちょうた)千代田(ちよだ):池田町の地名。元はアイヌ語のチエオタ(『我ら・食べた・砂場』の意味《永田方正『北海道蝦夷語地名解』》)で、明治初期に蝶多村と当て字し、大正2年(1913)に蝶多が読みにくいと、縁起がいい「千代田」に変えた。

2 堰堤(堰堤:えんてい):川の水や土砂などをせき止めるために、川の流路を横断して建設された構築物のこと。

2段になった千代田堰堤 ... いろいろなところをよく見てみよう

千代田堰堤は、1段でつくられました。しかし、今、千代田堰堤を見ると2段になっています。

千代田堰堤は、農業用水取水せきと川底がけずれて低くなるのを防ぐ施設として、昭和10年（1935）の完成から、何度も洪水にたえてきましたが、少しずつそのダメージを受けました。とくに昭和50年（1975）の洪水の時には、えん堤下流の川底が水の流れて大きくけずられて、そのままではひっくり返るおそれが出てきました。

そこで、よりがんにょうにし、流れ落ちる水の勢いをやわらげるため、えん堤を2段にする工事が昭和51～52年（1976～77）におこなわれたのです。

千代田堰堤の「滝」の流れをよく見ると、下から向かって右側（左岸側）にはげしく流れ落ちる場所があります。えん堤の上はしが落としてあるのです。このすぐ上流に、農業用水を引くための取水口があります。

これは、流れる水の量が少ない時でも、取水口の所に水が集まるようにするための工夫です。

また、昭和51年（1976）の工事の時、魚が川をのぼりやすいようにと、右岸側に魚道もつけられました。

さらに、千代田堰堤のあるあたりでは洪水が流れにくくなっていたことから、平成19年（2007）、千代田新水路がつくられました。千代田新水路には「分流せき」があって、ふだんの水は千代田堰堤へ流し、洪水の時には新水路へも流すということができます。



えん堤の角が落としてあるところと 右岸側（4）にある魚道、取水口。



米を食べるのは特別なこと ... 盆と正月とお客さんのとき

明治30年（1897）、鳥取県から池田農場に移住した人たちは、池田へ向かう途中休ませてもらった家の人が、イナキビのおかゆを食べているのを見て、「自分達は郷里で米以外は知らなかったのびっくりした」といいます。（池田農場入地者の『昔をしのぶ座談会』）

入植してからは、「米なんかは盆と正月にしか食べられませんでした。お客さんが来るとやはり米のご飯を出したので、その残りが私達子供に当たるので客が来るのが楽しみ（丸山善二さんの話）」という生活になりました。

開拓者の子どもたちが学校で食べた、弁当の思い出を見つめてみましょう。

「米などは盆か正月ぐらいなもので、普通は稲黍飯に麦やアズキ（小豆）を入れた粗末なものでした（野尻久吉さ

んの話）」
 「明治末期に至り、米も試作されましたが主食を充たすことはできず、麦や稲黍が常食で季節には、唐黍や芋、南瓜の弁当もありました。昼近くになると、暖房のいりりの灰の中に芋を入れて焼いたのも思い出の一つです（堀井忠治さんの話：東台小学校開校記念誌『東台の灯は消えず』）」
 「弁当は稲黍や唐黍の入った握り飯であった（野村慈弘さんの話：池田小学校『開校六十周年記念誌』）」
 「麦や稲黍ばかりで育てられた私はまだ良い方で、十日川の奥から通学していた友だちの中には、毎日の弁当がソバだんごばかりで通っていた人もいたものだ（藤山諭さんの話：下利別小学校『開校六十周年記念誌』）」

（「」の中は『池田町開拓夜話』より）
 （「」内、漢字・かなづかいなどは原文のまま）

3 左岸（さがん）：川の downstream に向かって見た時、左側の岸のこと。
 4 右岸（うがん）：川の downstream に向かって見た時、右側の岸のこと。